

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 3年次生 久保 愛奈

1. 概略

この度、本学の国際交流基金の助成を受け、医療プログラムに参加した。

研修国：カナダ

語学学校：Vancouver International College

研修期間：2018年8月18日～8月27日

目的：カナダと日本における医療制度や薬剤師の役割を比較することで、今後必要とされる能力を知る。また、英語を使わざるをえない環境に身を置く。

2. Vancouver International College (VIC)

VICは2000年に設立された語学学校であり、原則英語以外の言語を校内で使うことは禁じられている。今回は薬学英语プログラムということで特別にスケジュールを組んでいたが、講義だけでなくゲストスピーカーによる講話や学校外の医療施設の見学の機会も設けられた。

2-1 講義

主に症状、剤形の表現、服薬指導、実験結果の推移、薬の歴史を、ロールプレイ、短文読解、プレゼンテーションなどを通して学習した。ただ薬学英语を学ぶだけでなく、事実に対する意見や、日本で学んでいることを聞かれることがあった。その質問では伝えたいことを英語で表現する難しさよりも、普段いかに周りに無関心に過ごしているかを思い知った。



2-2 ゲストスピーカーによる講話

現地の救急救命士と医師の方に学校に来てお話をしていただいた。主な話題としては、それぞれの職に就く方法、勤務形態、仕事内容などであった。

2-3 救急救命士の方による講話

カナダで救急救命士になるには、3週間から2年以上のコースを選択し、学校に通う必要がある。コースは4段階に分かれており、資格取得に要する時間の短いものから EMR (Emergency Medical Responder)、PCP (Primary Care Paramedic)、ACP (Advanced Care Paramedic)、CCP (Critical Care Paramedic) である。4種の仕事の差の1つに、投与する



ことのできる薬の幅があった。PCPであるゲストスピーカーの方に勤務中に携帯している jump kit (救急救命用バッグ) 内の薬を見せていただいた。想像していたよりも種類が多く、写真のナロキソンやエピネフリン、ジメンヒドリナートに加え、アスピリン、ニトログリセリンスプレーも含まれた。最

も驚いたことは、日本では医師の指示の下で薬を投与することができるが、カナダでは救急救命士の判断で投与できる薬もあるということだ。そのため、救出での困難な場面に立ち向かうことや、身体的疲労に耐えることに加え、多くの質問によって投与すべき薬を考えることも仕事だと話された。

2-4 医師による講話

カナダでは、薬剤師になるための所要期間が5年間であった。しかし、現在は7年間になっている。お話を伺った方は、5年間かけて薬剤師になり、その後医学部に通い直して現在医師をしている。医療体制について、患者は全員クリニックに行く必要があり、その後必要であればクリニックで専門医を紹介してもらう。緊急であればすぐに診てもらえることができるが、そうでなければ数ヶ月以上かかる。カナダでの医療問題として、患者がすぐ専門医に診てもらえないことが挙げられる。医療費が無料で税金によって賄われていることが原因のひとつだと話された。医師の給与と診る患者の量のバランスをとることが困難で、長時間待たなければならない患者ができてしまうということだ。長時間待たされる患者が多いため、セルフメディケーションが発達しているのではないかと話された。

3. 見学

4つの施設を見学した。日本でも滅多に見る機会のない種類の施設も訪問し、様々な視点から医療を見ることができた。

3-1 Sprott Shaw College

今年で115周年を迎え、その記念のケーキをいただいた。ビジネス専門学校で、貿易系、コンピューター系など様々なコースがある。今回は、韓国で薬剤師免許を取得し、カナダに移住され、薬剤師免許を取得された方にお話を伺った。カナダの薬剤師の業務は韓国や日本のそれと大いに異なる。カナダでは、日本で知られている薬剤師の業務が職種として Pharmacy Assistant、Pharmacy Technician、Pharmacist の3種に分けられる。主に、Pharmacy Assistant は事務処理を、Pharmacy Technician は調剤を担うが、その責任は Pharmacist が負う。後者の2つについて教育の到達点は異なるが、Pharmacy Technician が実務的に学ぶことも、Pharmacist は科学的観点から学び、より根本的な理解を得る必要がある。Sprott Shaw College では、33週間のコースから Pharmacy Assistant になることができる。さらに、国外で薬剤師免許を取得済みで、バンクーバーでの薬剤師免許取得を希望する場合の語学プログラムも存在する。



3-2 St. Paul's Hospital

1906年頃に初めてレントゲン機器を所有した病院の一つであり、Providence Health Care というカトリック系の機関が運営している7個の医療施設のうち最も歴史がある。現在はティーチングホスピタルとして有名で、国際的に心疾患、腎疾患、栄養障害、エイズなどの業績を認められている。この病院では薬剤部を見学した。薬品の盗難がないように人々の目につかないところに配置され、65人が24時間待機している。65人のうち3人が Pharmacist である。コンピューター上で手書きの処方箋をチェックし、Pharmacy Technician が調剤する。薬剤部以外の薬剤師は服薬指導、医師や看護師とともに Medikation の相談をする。Pharmacist はその2つの業務を交代で担当している。

3-3 Vancouver General Hospital (VGH)

VGHはカナダで2番目に大きな病院である。よって、様々な科の専門医が在籍し、紹介による患者のみが来院する。今回は公式のツアーではないため、外観の見学が中心になった。幾つもの棟に分かれていて、想像以上に広がった。左の写真の掲示板には在籍する科が書かれている。1つの棟あたりとは思えないほど多かった。右の写真は、がん専門の棟の前にあった石で、描かれているのはがん患者を激励する言葉である。お見舞いに来た人が描いたと思われるものもあれば、本人が描いたと思われるものもあった。特に本人だと推測されるものは表現が真に迫るようで心が痛んだ。



3-4 UGM Recovery Centre

UGMは、貧困や依存症から立ち直るためのキリスト教系の慈善団体である。1940年、Bob Staceyが21歳の時に設立した。ニューヨークでレスキュープログラムを通して人の人生が変わっていくのを見たとき、バンクーバーで苦しむ人にも同じく慈悲をかけるべきだと神に言われたように感じたことがきっかけだった。館長の方にお話を伺った。UGMでは朝食とコーヒーを無料で提供していて、毎日約100人がやってくる。食堂では、有名店で働いていたような一流のシェフ達が料理を作っている。収入が減る可能性があってもやりがいのある仕事を求めてUGMで働いている。美味しい食事によって、生きる価値を見いだすこと、人としてのプライドを保つことが目的である。また、バンクーバーは地価が高く、貧困から立ち直っても家を借りることが困難であるため、一時的な家としてベッドや洗濯機も完備している。不安を取り除き新しい希望を見出すため礼拝もある。老若男女問わず様々なプログラムがあり、貧困や依存症から立ち直った人が、苦しんでいる人を助けるシステムもある。UGMは、差別なしに神の愛を分かち合い、それを実証することで、神に与えられた尊厳を取り戻すことを目標として掲げている。そのため、スタッフは人々に寄り添い、希望や復帰に向けて手を差し伸べるといふ理念がある。その考えを説明するために "Helping Without Hurting" という本を勧められた。直訳すると、"傷つけることなく助ける"である。手取り足取り世話をしてしまうと、施設を出た時に自力で生活できず、再び元

の生活に戻ってしまう可能性があるため、UGMはあくまで更生したい人の“手助け”をする施設であり、自主性を重んじていることがわかった。

4. 自由時間

放課後や週末にはカナダの文化に触れ、自ら英語を使う機会を得られた。同じプログラムに参加した者同士で行きたい場所が一致すれば一緒に、そうでなければ各々で行動した。ホストファミリーを含め現地の方々は皆思いやりに溢れ、困っていたら助け、わからないと言えれば分かるまで教えてくれた。誰もが、言葉を考えている間は待つ、話し出すと理解しようとしてくれた。

4-1 ホストファミリー

ホストファミリーはまるで家族のようであった。毎日昼食を用意して、困った時には助言をいただき、わからないことは何でも親切に答えてくれた。日本に帰る最後の日には、共にお酒を飲み、多民族国家であるカナダでの人種の考えや宗教との付き合い方に触れることができた。しかし、沈黙は落ち着かないという文化で、多くの質問をしてくれたホストファミリーに最低限の答えしか返せないことや、会話を続けたくても質問が思いつかないことがとても歯がゆかった。それだけでなく、道に迷って帰宅時間が遅くなったことや、現地の名所に気をとられることで、ホストファミリーと十分な時間を過ごせなかったことを気がかりに思っていた。ホストファミリーと別れた後、連絡を取る機会があった。気になっていたことについて尋ねると、積極的にカナダを楽しもうとしてくれて嬉しかったと言っただき、とても心が救われた。

4-2 放課後

Vancouver Art Museum、Granville Island、Kitsilano、Grouse Mountain、Stanley Parkなどを訪れた。ホームステイ先が多少辺鄙な所でも、語学学校のアクセスが良いため、目的地を妥協せずに済んで嬉しかった。

4-3 週末

Victoria Island に行った。事前にツアーに申し込んで行くこともできたが、極力英語を使うため、往復 8 時間かけてバスと電車とフェリーを乗り継いだ。目的地に着いて、ほとんどの時間は街並みを見ることに費やされたが、イギリスの植民地であったこともあり、バンクーバーにはない雰囲気がとても心地よかった。滞在時間が短いことが予めわかって

いたこともあり、Wi-Fiのない、見知らぬ土地に一人で行くことは勇気が必要だったが、とても有意義な経験であった。

5. 所感

今回の研修で、医療制度において日本は過渡期にあると感じ、今後薬剤師の仕事は淘汰されると考えた。その時代を迎えた時、存在価値のある薬剤師であるためには、より核心的な知識が求められるだけでなく、正確な知識を速く引き出す力が必要であると思う。現在のカナダでの **Pharmacist** の仕事は想像していたより医師や看護師、患者との距離が近い。たとえ十分な知識を持っていても、話し合いの時に適切なことを言えなければ意味がないと思った。また、講義を含め日常生活を通して、自分が興味を持ち知りたいと思うことを学び発信できる人間になりたいと思った。そのために、普段から疑問を持つこと、それを恥ずかしがらずに伝えることが大切だと思った。